

花を贈る

Photograph
Shoji Ueda

Children the Year Around

写真 植田正治

シリーズ <童暦>より
1959-1970年



『まなぎしの記憶』

植田正治
鷺田清一

あなたはどんな時に花を贈りますか。

幸せでありますように。

どうか安らかに。

おめでとう。

早く良くなってね。

今までどうもありがとう。

なぜ、人は花を贈りたくなるのでしょうか。

生きた花、美しい花束。枯れない造花ではなく、命ある植物に託される私達の思い。祝福、告白、弔い。私達の喜びや命の傍で、いつも花は心を伝えてくれます。

愛情を込めて栽培された花は、土から人の手に渡り、市場を通って見知らぬ町へそしてあなたの元へ届きます。花もたくさんの旅をしてきているのです。

「花には、華やぎがある。」

臨床哲学者の鷺田清一さんはいいます。

「が、花は散る。枯れる。そして落つ。ここにもまたいのちの定めがくつきり映されている。だから、花を贈るといふのは、やがて咲くこと、やがて萎むことをもぜんぶひっくるめて、いのちのしるしを贈ることなのだろう。」

幸せも哀しみも、喜びも悔しさも、私達が精一杯に生きた証拠です。

花は、言葉にならない想いも伝えます。

だからきつと、花束はいつも涙や笑顔と共にあるのでしょうか。

(花を贈る『まなぎしの記憶』だれかの傍らで) 植田正治/鷺田清一 CCCメディアハウス

花物語

比田井宗玉

